

## 体罰根絶に関して

スポーツは人類が生み出した貴重な文化です。それは自発的な運動の楽しみを基調とし、障害の有無や年齢、男女の違いを超えて、人々が運動の喜びを分かち合い、感動を共有し、絆を深めることを可能にします。さらに次代を担う青少年の生きる力を育むとともに他者への思いやりや協同精神、公平さや規律を学ぶ人格を形成します。

殴る、蹴る、突き飛ばすなどの身体的制裁や、言葉や態度による人格の否定、脅迫、威圧、いじめや嫌がらせなど、これらの暴力行為は、スポーツの価値を否定し、私たちのスポーツそのものを危機にさらします。フェアプレイの精神やヒューマニティーの尊重を根幹とするスポーツの価値とそれらを否定する暴力とは、互いに相いれないものです。暴力行為はたとえどのような理由であれ、それ自体許されないものであり、スポーツのあらゆる場から根絶されなければなりません。

(スポーツ界における暴力行為根絶宣言 平成 25 年) より一部抜粋

この宣言から 10 年近くが過ぎ今やスポーツにおける指導において「体罰」は全く許されないものとなっております。

京都府ドッジボール協会では、今一度指導の在り方について再度自らが振り返って見直すことを提起いたしますとともに、ここに改めて「体罰根絶」に対する断固たる態度を表明いたします。

初心に帰りまして、「スポーツ界における暴力根絶宣言・指導者」を掲載いたします。

## 指導者

- 指導者は、スポーツが人間にとって貴重な文化であることを認識するとともに、暴力行為がスポーツの価値と相反し、人権侵害であり、すべての人々の基本的権利であるスポーツを行う機会自体を奪うことを自覚する。
- 指導者は、暴力行為による強制と服従では、優れた競技者や強いチームの育成が図れないことを認識し、暴力行為が指導における必要悪という誤った考えを捨て去る。
- 指導者は、スポーツを行う者のニーズや資質を考慮し、スポーツを行う者自らが考え、判断ができる能力の育成に努力し、信頼関係の下、常にスポーツを行う者とのコミュニケーションを図ることに努める。
- 指導者は、スポーツを行う者の競技力向上のみならず、全人的な発育・発達を支え、21 世紀におけるスポーツの使命を担う、フェアプレイの精神を備えたスポーツパーソンの育成に努める。

コロナ下ではありますが、各府県オープン大会・練習試合等が行われております。

指導者の皆様には、上記事項を再確認していただきまして選手・チームへの対応をお願いいたします。